TAKAOKA DESIGN & CRAFT CENTER

NEWS LETTER

2018
11
November

vol.02

COVER STORY　**工房を訪ねる　－　金工轆轤職人　和田順吉　－**

最新情報　・中国の若手職人・デザイナーが高岡の若手職人と初の交流
・工芸ハッカソンで生まれたプロジェクト発展形を東京で発表　ほか

商品紹介　・鍛木皿 -- 株式会社駒井漆器製作所　・おろし板 --- 株式会社竹中銅器

工房を訪ねる

金工轆轤職人　和田順吉

分業で成り立つ高岡の鋳物産業の中で、鋳物のあとにおこなう工程として「轆轤（ろくろ）」という鋳物の表面を削って整える工程があります。轆轤をかけ終えた製品は彫金や着色など仕上げの工程へと移っていきますが、最終的に製品の品質を左右する大事な工程である轆轤の技を継承する職人は希少な存在となっています。本号では、この轆轤工程を専門に担う職人をご紹介します。

和田順吉　わだ・じゅんきち

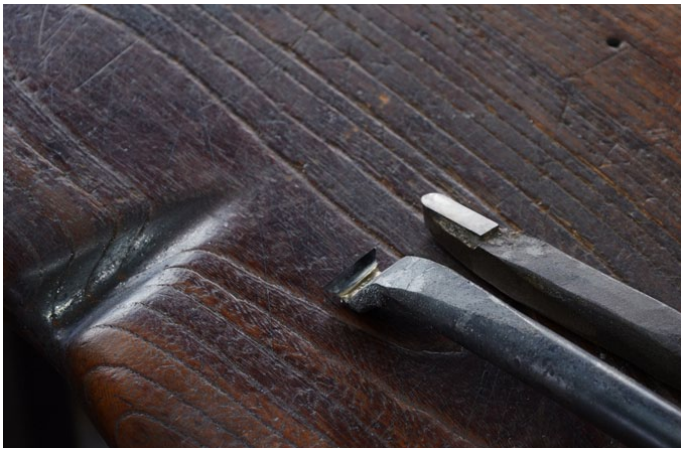
昭和15年生まれ。昭和31年北陸アルミニウム㈱に入社し、鋳造加工治具作り、火造りを習得。昭和34年から家業の銅器轆轤加工に従事。群馬県埋蔵文化財調査センターの佐波理の銅鋺レプリカ轆轤仕上げ、法隆寺の仏具轆轤加工仕上げ、福島県文化財センターの銅鋺・銅鏡・水瓶レプリカ轆轤仕上げに携わる。平成15年高岡市伝統工芸産業技術保持者に指定。平成24年高岡市民功労者表彰。

高岡銅器分野の業界で数少ない手仕上げ轆轤の職人として活躍されている和田順吉さん。今年で七十八歳になる今も現役の職人だ。

和田家の金属加工業としての歴史は明治～大正時代に、和田さんの祖父が興した鋳物業にさかのぼる。当時は置物などを中心に鋳物製造を行っていたが、昭和に入り太平洋戦争が始まると、武器生産に必要な金属資源の不足を補うために金属類の供出が行われるようになる。和田家でも鋳物で使う道具、材料からタネ型と呼ばれる製品の型までもが供出に出され、終戦後は鋳物の仕事ができない状態となった。そこで昭和二十三年に和田さんの父が新たに生業としたのが金工轆轤だった。

終戦直後の高岡の鋳物製品は日用品のアルミ製鍋・釜を主として生産していた。その頃は鋳物の工程が終わるとそのままの状態で出荷していたが、表面を削ることによって使用する金属材料が節約でき、なお且つ軽く綺麗な製品になるという利点から徐々に轆轤で仕上げる製品の需要が増えていった。当時、高岡では金工轆轤を生業とした職人は数多くいたそうだ。

職人の祖父と父の背中を見て育った順吉さんだが、父から後継ぎとして家業を継ぐ前に「他人の飯を食ってこい」と一度外に出て働くことを勧められる。昭和三十一年には十五歳で北陸アルミニウムに就職。会社では導入して間もない轆轤をマンツーマンで指導してもらい、道具作りから切削方法まで轆轤技術をひと通り習得。昭和三十四年に退社し、家業を継ぐこととなった。



刃物を木の台に押し当てながら切削するため台には自然にできた味のある凹みが所々に見られる。

回転軸が出ていなくても手で微調整をしながら轆轤をかけるのが和田さんの技だ。

家業を継いで昭和四十年に父が他界するまでの間は父、叔父、和田さんの三人で仕事をまわし、銅器や切削の難しいアルミ製品も多品種を請け負い、忙しい日々が続いた。仕事相手を一社に限定する職人もいるなか、和田さんの工場ではどんな仕事の依頼も断ることはしなかったという。現在も現役の職人である和田さんだが、同業者が廃業するなかでも生き残ってこられたのは様々なアルミ・銅器製品に対応できる技術力と経験があるからこそなのだろう。

轆轤の仕事は削るものに合わせてセン（左下の写真）やツバ（木製）といった道具を作るところから始まる。ツバは製品をはめ込んで固定する道具で、製品の大きさに合わせて木の塊を削り出して作る。また、センと呼ばれる切削用の刃物も製品の形状に合わせて用意しなければならず、工場にある二～三百本近くあるセンは今までの仕事の歴史ともいえる。道具の仕立ても良い製品を生み出す大切な工程だ。

少し若い頃の和田さん。
今もこの場所で轆轤をかける。

2～300本近くのセンはどれも和田さんオリジナル

いまではNC旋盤等の機械の進歩により加工時間の短縮や操作の手軽さから手仕上げ轆轤を専門に行なう職人は少なくなっている。そんな中でも和田さんの技術は一気に削り仕上げる機械旋盤とは異なり、薄い製品や偏肉の製品を微妙な力加減で仕上げていくことができる。機械では表現できない滑らかなカーブや面を作り上げる和田さんの技は、繊細で質の高い製品を作るうえで今もなお求められている。

【セン】木工で言うところのカンナ。回転する器物をセンという刃物を使って切削する
【ツバ】木製の治具。ここに製品を嵌め込んで固定し、轆轤を回転させ、センを使い削っていく

市民向けものづくり体験教室

素のものワークショップ

開催レポ

2018.9.22 - 23

9月に高岡市中心市街地をメイン会場として開催された「高岡クラフト市場街」に合わせて、市民向けのものづくりに親しむ体験教室「素のものワークショップ」が9月22日(土)と23日(日)両日、市デザイン・工芸センターで開催された。これは地元の工芸作家、職人が講師となり、ものづくりをテーマとしたワークショップを開催することで、作り手の発表機会、消費者との交流の場を提供するとともに、地場産業を中心としたものづくりの魅力を知ってもらおうと企画したもので、期間中はのべ五十名近くの市民が参加した。体験内容は漆、金属、木工、左官の四つのコースにわけられ、「食卓で使う道具」をテーマに銅のフライパンや漆の小皿、土かまど、木の枡の制作を行った。

土かまどの制作では和やかな雰囲気の中、型枠に土を込め、型から外す瞬間に歓声が上がるなど盛り上がりをみせていた。また、銅板で作るフライパン制作ではガスバーナーや金槌など普段はあまり使うことのない道具を前に最初は参加者も戸惑った様子だったが、徐々に扱いに慣れ真剣な表情で制作に取り組んでいた。

素のもの展-手仕事をめぐる素材と道具-

左官コテ(素のもの展)

素のものショップ

また、この体験教室の開催に合わせて近隣の㈱能作の社屋では、ワークショップ講師が使用している道具や素材の展示や各素材を使った作品販売も行われ、来場者は好みの作品を手に取ったり、普段は見ることのできない職人道具に足を止めるなど興味深く見入っていた。

◉ イベントの開催情報は、市デザイン・工芸センター WEBトップページ (http://suncenter.co.jp/takaoka/) でお知らせいたします。

工芸ハッカソンで生まれたプロジェクト 発展形を東京で発表

「工芸ハッカソン」は、2017 年に「国際北陸工芸サミット」の一環として富山県高岡市で開催された。金属工芸や漆芸の技と心意気を 400 年以上受け継ぐ高岡市を舞台に、地元の伝統産業の職人や工芸作家と、エンジニアや研究者、アーティストなど異分野の方たちがチームを組み、７つのプロジェクトが生まれた。漆塗りを用いたインスタレーション、伝統工芸に IoT を組み込んだプロダクト、AI と職人の協働による作品、エンジニアリングを用いた技術継承のための新しいシステム…。それらは単なるアイデアに終わらず、その後も取り組みが継続している。

11 月末からは東京でプロジェクトの最新状況を展示やトークセッションを通じて紹介するイベントが開かれ、手仕事とテクノロジーの融合による日本発の文化や産業のイノベーションの可能性を探る。

イベント概要

文化庁委託事業「平成 30 年度戦略的芸術文化創造推進事業」
工芸ハッカソン 2018 ～展覧会・トークセッション・ワークショップ

日時　2018 年 11 月 30 日 (金) 10:00 ～ 21:00
　　12 月 1 日 (土) & 2 日 (日) 10:00 ～ 18:00
会場　渋谷・EDGEof（東京都渋谷区神南 1-11-3）　入場無料（登録制）
主催　文化庁、有限会社エピファニーワークス
制作　有限会社エピファニーワークス
協力　富山県、高岡市、富山大学、富山県総合デザインセンター、高岡市デザイン・工芸センター、KDDI 株式会社、株式会社エッジ・オブ

問合せ先　(有) エピファニーワークス 内「工芸ハッカソン」事務局
　　info@kogeihackathon.com

中国の若手職人・デザイナーが 高岡の若手職人と初の交流

「第 1 回日中若手職人交流事業」が 10 月 11 日 (木) ～ 17 日 (水) の日程で日本で開催された。この事業は中国の中間層の意識がここ数年で大きく変化する中、中国の製造業のあり方も変わってきており、日本の質の高い製品や手仕事の技に学び、また将来の相互交流の可能性を探ることを目的として実施された。

期間中、中国からは本事業のプロデューサーで経済ジャーナリストの呉暁波氏をはじめ若手プロダクトデザイナー、職人、企業経営者、大手メディアなど約 160 名以上の視察団が来日し、東京でフォーラム・展示を行ったほか、視察先として東京、京都、大阪のほか、高岡市も視察先として選ばれた。

高岡市内の視察は 10 月 15 日 (月)・16 日 (火) の日程で市デザイン・工芸センター、高岡御車山会館、能作、武蔵川工房などを見学した。また地元高岡の若手職人とのディスカッション・交流会も行われ、日中両国のものづくり産業の交流・発展へ向けた新たな一歩となった。

呉暁波氏は 10 月 15 日（月）囲み取材に応じ、「ここ数年中国人はデザインのいい綺麗なものを買いたいという意識があり、その購買力も高まっている。そのため特に中国の若者にとって、職人の作る凝った商品が大人気」とコメント。髙橋正樹高岡市長も、「同じ工芸を目指す、エネルギーのある若い職人が互いに切磋し、新しい境地を求めていってほしい」と述べた。

問合せ先　(有) エピファニーワークス（富山県高岡市 プロモーション担当）
info@epiphanyworks.net

NEW ARRIVAL 商品紹介

鍛木皿（たんもくざら）

株式会社駒井漆器製作所

栃の表面に槌目 (つちめ) を施し、凹凸を表現したお皿です。彫刻でも得られない表面の独特のテクスチャーは高岡の鍛金職人たちとの試行錯誤の結果生まれました。和洋問わず様々なお料理にお使い頂けます。

素材　栃、漆、金箔、銀箔　　※仕上にガラス塗装
種類　たまゆき、さみだれ、たんもく　　各サイズ直径 13、18、24、30 ㎝
価格　4,600 円～ 26,000 円（＋tax）
色　　漆仕上げ、金箔仕上げ、銀箔仕上げ
共同製作者　IRON CHOP 澤田健勝、シマタニ昇龍工房
問合せ先　株式会社駒井漆器製作所　電話 0766-25-3383

おろし板

株式会社竹中銅器

鋳物の文様表現と鋳肌を活かした「おろし板」。和風柄の突起で山葵や生姜などの薬味をおろします。美しく上品なデザインは食のシーンに花を添えてくれます。

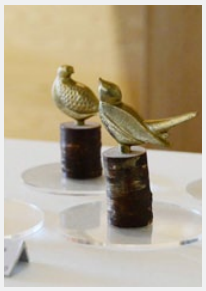
素材　鉛レス真鍮、木　※銀メッキ仕上げ
種類　梅小紋、麻の葉、鯉（容器タイプ）
価格　梅小紋、麻の葉　10,000 円（＋tax）、鯉（容器タイプ）11,000 円（＋tax）
共同製作者　株式会社桜井鋳造、横山挽物木地
問合せ先　株式会社竹中銅器（デザイン室）　電話 0766-28-6266

イベント情報

10/7（日）～ 3/24（日）
課題のデザイン　展示・試験販売

市デザイン・工芸センターが「課題のデザイン」をテーマに実施している新商品開発プロジェクトの試験販売会。13 社から 14 名が参加し、試作品の検討を進めてきた。本紙商品紹介ページに掲載の「鍛木皿」「おろし板」も販売する。

会　場　㈱能作　本社ロビー（高岡市オフィスパーク 8-1）
日　時　平成 30 年 10 月 7 日（日）から 平成 31 年 3 月 24 日（日）まで
問合せ　高岡市デザイン・工芸センター　電話 0766-62-0520



取材編集・発行

高岡市デザイン・工芸センターニュースレター vol.2
平成 30 年 11 月発行

高岡市デザイン・工芸センター
〒939-1119 富山県高岡市オフィスパーク 5
TEL. 0766-62-0520　FAX. 0766-62-0521
http://www.suncenter.co.jp/takaoka/
E-mail.tdcc@suncenter.co.jp

休館日　月曜・祝日・年末年始
開館時間 9:00～17:00

お知らせ

高岡市デザイン・工芸センターでは市内の伝統産業関連事業者からのデザインや製品開発に関する依頼に対し、デザイン作成（有料）・デザイン相談を行っております。ご希望の方はお電話（0766-62-0520）でお問い合わせ下さい。